

佐伯地区遺跡群発掘調査概報 Ⅱ

とがむれ
樽牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報 Ⅱ

保存用

記述から

1990

佐伯市教育委員会

はしがき

佐伯市の稲垣・上岡地区と堅田地区には、大神姓佐伯氏に由来する鎌倉時代から安土桃山時代に成立・造立された神社・仏閣・城館・石塔などが数多く点在しています。また、地元の人々の意識も高く、大切に保存されてきました。佐伯地方には、佐伯氏が治めていた頃のことを書き記した古文書がほとんど残されておらず、その時代のことは今なお詳らかではありません。こうしたことから、残された歴史的景観や史跡はほとんど唯一の手がかりとなっています。

近年、こうした静かな村々にも開発の波がおしよせて景観が変りつつあるのが現状です。堅田地区においては、総合運動公園やメカトロ・センターが造られつつあります。上岡・稲垣地区もまた、明治時代に写された写真と較べてみると住宅や工場などがたちこめていることが判ります。また、各地区においても大規模な圃場整備事業も既に始まっています。

このような事情から、佐伯市教育委員会は昭和63年に分布調査、試掘調査を実施しています。昭和63年の調査は、弥生町と佐伯市に広がる母牟礼山系の城郭遺構の分布調査と測量、並びに山麓の試掘調査でした。平成元年度の調査は、国庫の補助を受け、母牟礼山系東麓での試掘調査の続行と、圃場整備事業に関連する木立地区・堅田宇山城の発掘（試）調査を行ないました。

例 言

- 1 本書は大分県佐伯市所在の中世山城址母牟礼城と周辺遺跡の考古学的調査・地名調査・関連遺物調査の概要報告書である。
- 2 調査の費用は佐伯市教育委員会が国庫、県費補助を得、大分県教育委員会文化課の支援を受けて調査を実施した。調査の組織は次の通りである。

調査指導員 賀川光夫 別府大学教授

海老澤 衷 早稲田大学講師

調査員 大分県教育委員会文化課 埋蔵文化財第1係長 清水宗昭

同 主 事 綿貫俊一

佐伯市教育委員会 教育長 鳥井喜久太 社会教育課長 御手洗正明

同課長補佐 田島 栄治 同副主幹 山田 健一

調査協力者 江藤 磯吉 藤田喜代一 川村 武吉 染矢 栄 広瀬 繁雄

木許 讓 木許 重雄 緒方 寿生 高治 栄一 藤田 スナ

- 3 本書に使用した図のうち、現地で作製したものは山田と調査員による。トレースは牧尾義則氏・丸山啓子（大分県文化課）の御協力を得た。文章の執筆は綿貫俊一、高橋信武（大分県文化課）／野勝教（大分県文化課）で分担した。このほか、海老沢衷（早稲田大学文学部講師）、乙咩政巳氏（宇佐市教育委員会）等からも種々御指導をいただいた。
- 4 本書の編集は綿貫があたった。

いながき 稲垣・上岡地区の発掘調査の概要

いながき
稲垣・上岡地区は、母牟礼城を中心としてみると、東の山麓にあたる。この地区は、東に山上寺跡がある山地にはさまれた谷状地形の中にある。この谷の中央部を門前川が南流し、番匠川と合流する。谷を囲む山地のうち母牟礼城の立地する山地の麓には、大神姓佐伯氏ゆかりの、愛宕神社、今熊神社、祖母岳神社、九じん塔（十三重塔）が点在している。祖母岳明神は、佐伯惟治によって大永元年（1521）に「凶田」に作られたことが「大友興廃記」に出ており、その凶田と推定できる字迫田もこのあたりにある。

また、「大友興廃記」には、佐伯惟治と春好との関係、佐伯惟勝と木戸之瀬、深田伯耆、臼杵長景による母牟礼城の戦い等が記述されている。惟治は密教の茶吉尼法を春好から伝授され、その場所が門前川の東にそびえる山頂部にあった山（三）上寺であるという。山上寺跡には今も祠が山頂部の平坦地にあり、戦前まで参詣する人がいたという。佐伯惟勝は、木戸城に住んでいたとされているが、番匠川を渡って龍護寺詣りに行く途中、以前なくした脇差が木戸の瀬というところに沈んでいるのを見つけたとある。現在、「木戸ノ瀬」という小字は十三重の塔の東250mの場所にあり、この付近はかつて番匠川の河原であったことを示す地割が南北に広がっている。深田伯耆守は惟治の家臣であるが、大友義鑑に対する謀反の話が出た為、代理として釈明に府内に行ったとある。この深田伯耆守の屋敷跡と言われているのが1988年に発掘した古市1区（大字稲垣字掃木）の付近である。この地域の人々は「はわきのかみ」の屋敷

あると言っている。また母牟礼城合戦のケースでは、「野田、小倉山、小田ヶ峯、床木山、宮ノ河内、平井、土崎」等々現在でも母牟礼山系西麓（弥生町側）に観察される地名を記載している。

上のように、平時の場合の記述に関しては母牟礼山系東麓との関係が強い状況が指摘できる。また、祖母岳明神、愛宕神社、今熊神社、龍護寺等、佐伯惟治が造営・再建に関与したことを由来に持つ神社・仏閣が母牟礼東麓に多いのも注意を引く。その他、地名に目を向けると、「土井ノ内」、「引地」、「土井ノ外」、「柵田沖」、「射場ノ本」、「木戸ノ瀬」など、城館施設・戦略施設・造作に関係するとみられている地名もこの一帯に多い。

一方、山頂部を城とし、城主の平時の居館や家臣団の住居を山麓に作るという「根古屋式山城」は、上杉謙信や朝倉義景・大友義鎮（宗麟）
淡井長政などの居城を見ても判るように戦国時代の日本においては一般的であった。九州においても例外ではなく、中小の領主層の居城でもこの形を採用している場合が多い。こうした、根古屋式山城の平時の住いが建てられている山麓は、しばしば段々畑状・段丘状の地形として現在に残っている場合がある。このような、地形が観察されるのは、母牟礼山系の東麓と南麓である。このうち大規模な地形が観察されるのが東麓である。弥生町側の西麓にこうした地形はほとんど観察されない。

以上、長々と煩瑣な記述をくり返してきた。それというのも、佐伯氏一族の本城であった母牟

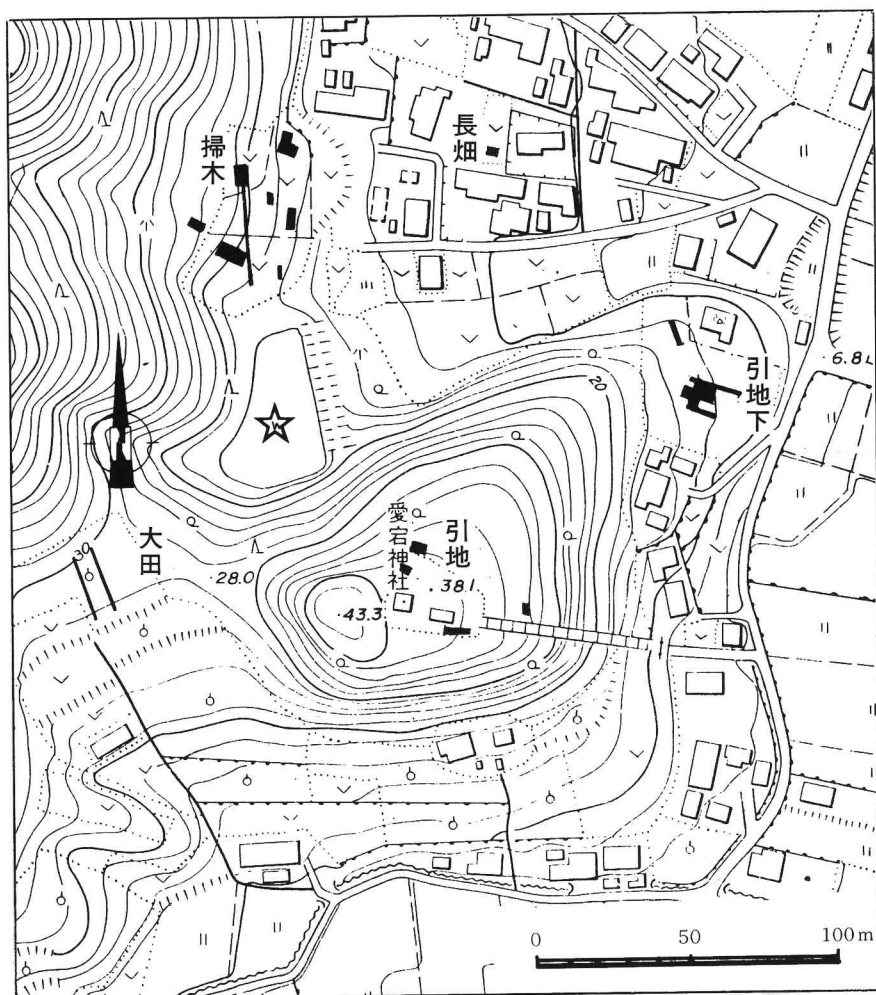


- | | |
|----------------|---------|
| 1 樽車礼城 | 7 中山砦 |
| 2 引地・引地下・掃木・長畑 | 8 長良神社 |
| 3 古市 (宿場跡) | 9 上ノ台 |
| 4 木戸城 | 10 宇山城 |
| 5 山上寺跡 | 11 常楽寺 |
| 6 高城 | 12 八幡山城 |

第1図 史跡分布図

礼城を中心とした場合、彼等の平時の住いはどこだったのかということに迫る為である。その結果、文献の記述、神社・仏閣の所在地とその由来、人々の伝承、地名のいずれを採りあげても榎牟礼城東麓地域に集中する傾向がみられる点を重要視したい。結果的には佐伯史談会を初めとした先学諸氏の推定と同様であった。ともあれ、そうしたことを確認する必要から、昭和63年に(1988)山頂部分の測量を中心に、東麓部

分の試掘を若干行なった。また、1989年の今回の調査は、東麓部分を集中的に試掘調査した。その結果、段々畑状・河岸段丘状地形の実態と遺跡形成年代を考察するのに必要な遺物・遺構に関しての成果があった。(綿貫)



第2図 1988・1989年発掘調査区 ☆印(マリア像出土地)

引地下地区

梅牟礼山系から延びる屋根の最先端部が東方の低地に没しようとするところにある。低地との比高差は約6mである。地理学のうえからは通常門前川の河岸段丘と理解される景観を示している。東方の門前川付近からふり返って見ると、愛宕神社（引地）の座する台地の縁に帯状に広がっていることが判る（第2図、写真1）。規模は、最大幅約50m、最大長約100mの広さを有する。

引地下地区の現状での帯状平坦面の利用状況は、北側から老人会の公民館、梨畑、民家となっている。試掘調査は、比較的まとまった面積を有する公民館と民家の間にある約1720㎡ほどの梨園で行なった。試掘面積は125㎡であったが、梨の木を避けた為に不規則な調査区の設定とならざるをえなかった。

表土から約40cmで遺構検出面である赤土粘土層（ローム層）が現われる。この層の上面を丁寧に調べると33ヶ所で柱の穴状の凹んだ場所のあることが判った。穴の大きさは大小様々であったが、そのほとんどは穴の直径が約30cm、穴の深さ約50cmほどの規模を有していた。遺構

と考えられたのはこうした穴ばかりで、溝や墓などは観察されなかった。これらの穴からは、中世に属する土師質と中国青磁などの器の小破片が出土した。近代の磁器破片も1例出土したが、土師質の器が出土した穴の埋土の土質とは違っていた。

発掘作業の結果、柱穴状の穴は「建物」として並ぶ事はなかった。しかし、穴の規模がほぼ同様であるので、人間の手による構造物に関連することは考えられる。

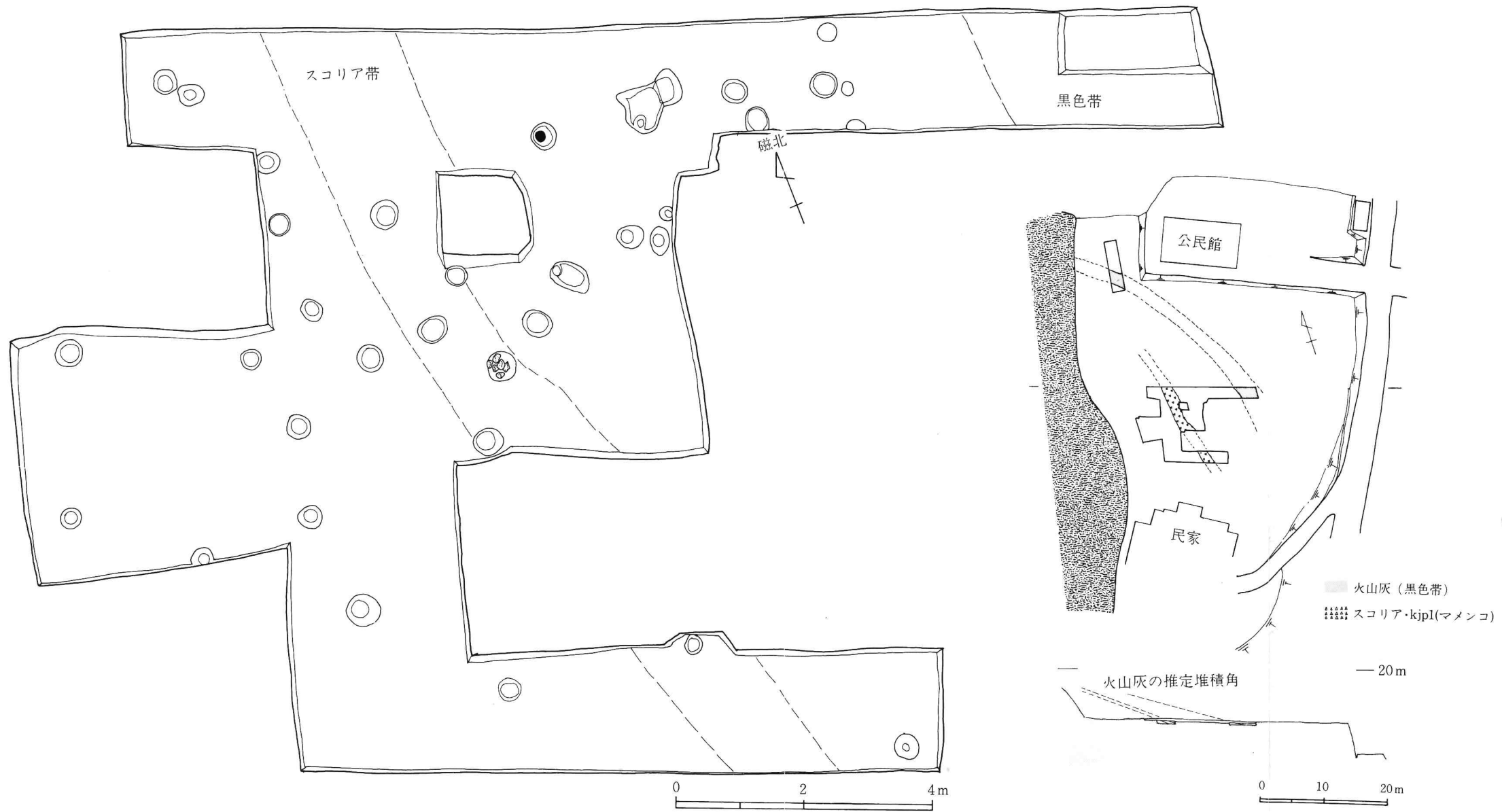
その他、調査区内には旧石器時代に属するKjp1（マメンコ）と黒色帯という二つの火山灰が帯状に広がっていることが観察された。これらの層の堆積角推定延長線は遺跡の背後を形成する愛宕神社境内（引地）の「崖」方向に延びていた。こうしたことから、ここは「河岸段丘」などではなく、人々の掘削作業に由来する平坦地である。（綿貫）



写真1 引地・引地下地区遠景



写真2 引地下地区調査状況



第3図 引地下1トレンチ遺構出土状況とトレンチ配置図

引地地区（愛宕神社境内）

この地区は以前から、中世佐伯総領家居館址と推定されてきた地である。梅牟礼山系から東に延る屋根の先端頂部に位置する。低地からの比高は約31mである。居館址と推定されてきただけあって、頂部は約4741㎡の広さを有する平坦地である。尾根状地形の様子からみて、不自然な平坦地であることは確かで、「引地（曳地）」という小字名はかつて造成されたことを物語っ



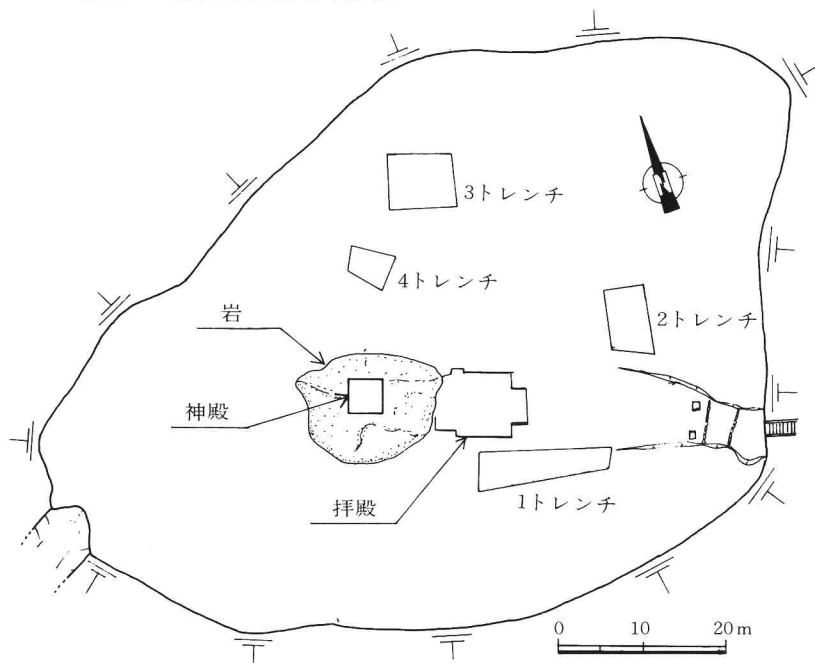
写真3 愛宕神社境内（引地）

ていると思われた。

平坦部のほぼ中央部には、屋根のコア（核）である岩が4mほど屹立しており、その上に神殿が鎮座する。更にその前方（東方）には拝殿がある。この神社は、大永元年に佐伯惟治によって勧請されたと伝えられている。神殿・拝殿・参道の周囲は、樹齢100年以上も経過しているとみられる常緑広葉樹が林立している。

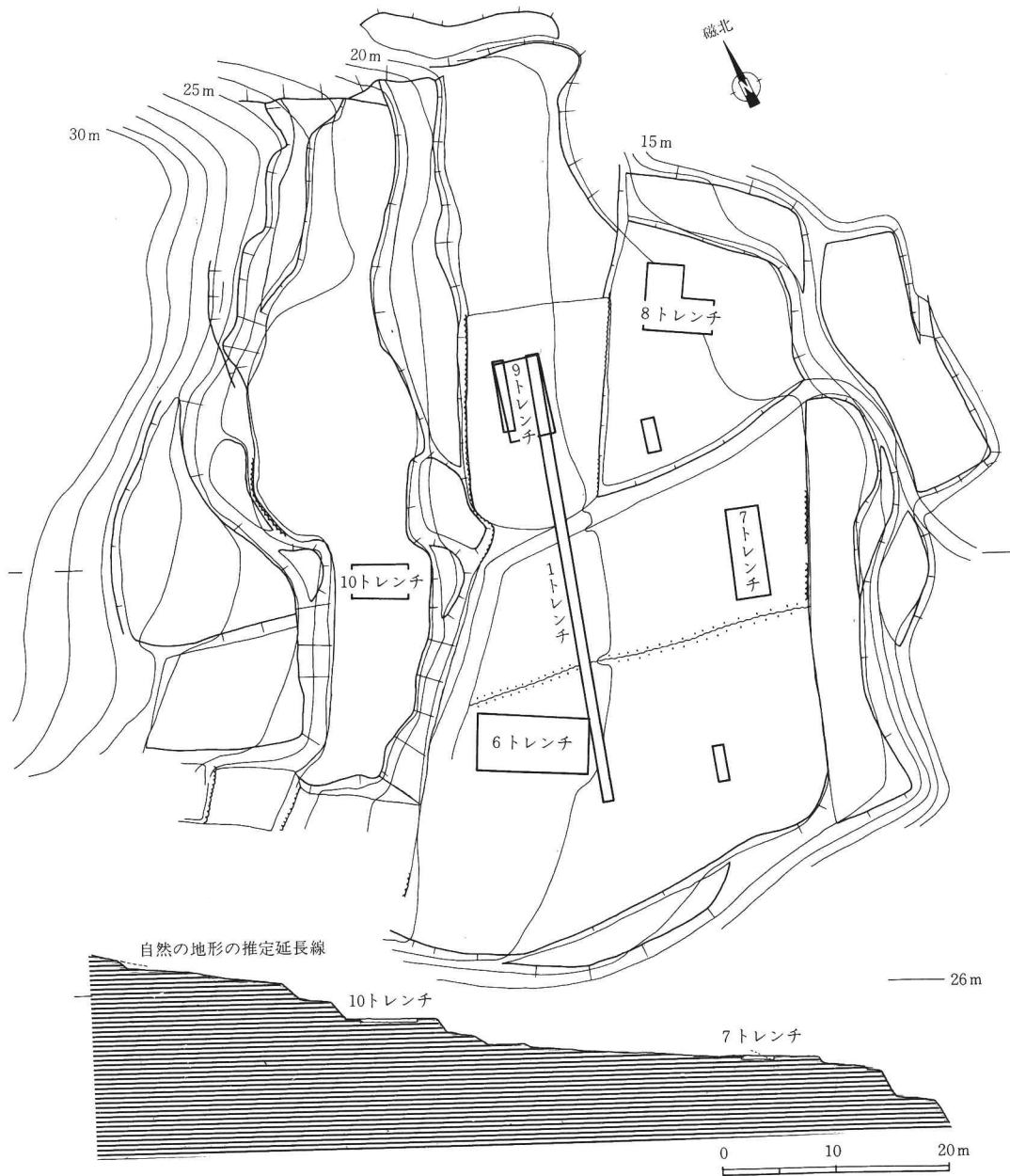
中世に溯る遺品としては、神殿の礎石に用いられた宝塔の笠石、林の中に残る五輪の塔の笠石だけであった。

発掘調査は林立する木立の中をぬうように4ヶ所のトレンチを設けた。このうち1トレンチから神社祭祀に関わる多量の近世・近代陶磁器が出土した他、2トレンチで同様の陶磁器が若干見つかった。中世に溯る陶磁器としては、3トレンチで見つかった一例の備前焼小破片の他に見つからなかった。



第4図 引地（愛宕神社境内）地区トレンチ配置図

表土層を除去すると基盤層の場合が多く、こうした平坦地で通常観察されるクロボク・ローム層は観察されなかった。したがって、時期は不明であるが、平坦面は人工的に造成されたと考えられる。ようするに造成・整地された景觀が遺構と言えよう。（綿貫）



第5図 掃木地区トレンチ配置及び地形図

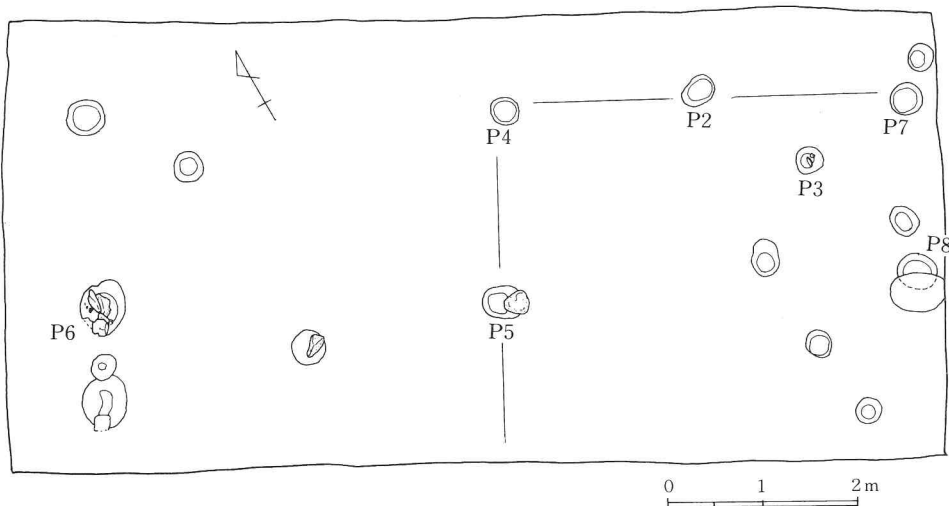
はわ 掃木地区

掃木地区は、愛宕神社が座する境内を中心位置に仮定すると北西の山裾に延びている。その景観は、山裾と低地の間を帯状に広がる河岸段丘状の小高い平低な台地である。低地との比高は約5mである。明治22年以前にこの台地の一部が掘削されて「溜池」が造られた。この際、仏像とマリア像の二体が見つかった。このあたりに住む人々は「掃木」が「はわきのかみ（深田伯諸著守のことか?）」の屋敷の跡であると言っている。掃木地区は1988年の調査

で、土坑（Pit2）内から多量の土師質土器が出土した古市I区と同じ地点である。

<掃木6トレンチ>

掃木6トレンチは柱穴状の穴が17ヶ所確認された。直径は25cm～30cm前後で深さは約40cm程度の例が多かった。6トレンチは建物が構成されるかどうかを確認する為に、50㎡の面積を発掘対象面積とした。しかし、P2・P4・P5・P7・P8から構成される柱穴状の穴が建物跡の可能性を残している他は、はっきりしなかった。多くの柱穴状遺構からは土師質土器の小破



第6図 掃木6トレンチ検出状況図



写真4 掃木6トレンチ（南西から写す）

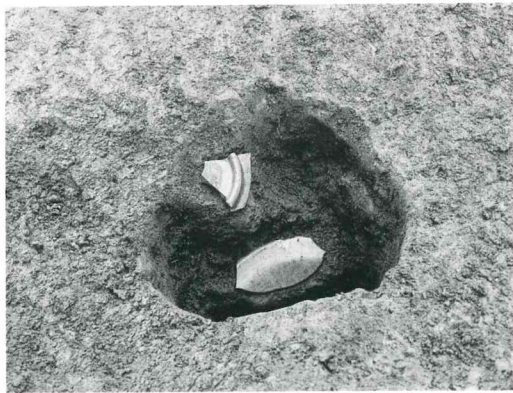


写真5 掃木6トレンチP3青磁出土状況

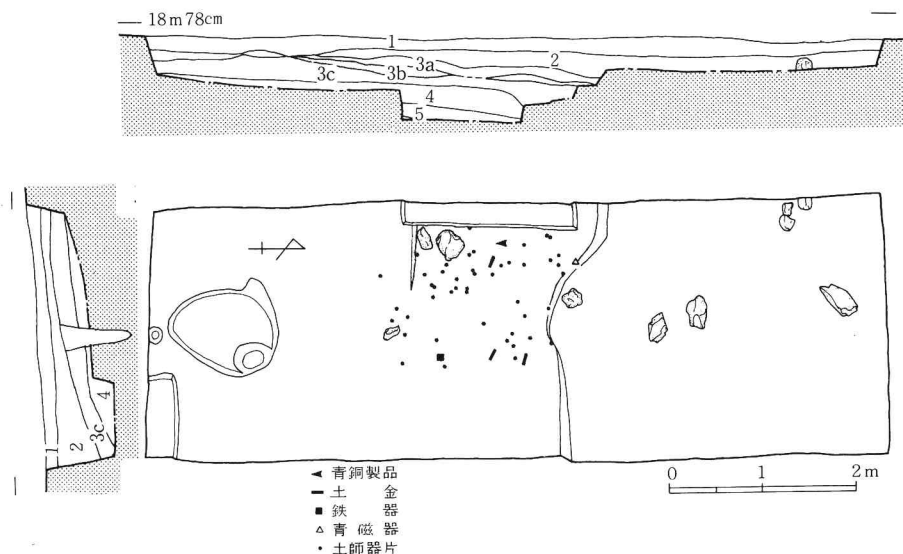
片が見つかった他、P3から龍泉窯系の中国製の磁器が見つかっただけである。これらの柱穴状遺構の中の土は、近・現代の陶磁器・骨が出土した穴内の土とは、しまり具合・色調の点で区別することができる。したがって、これらの遺構が江戸時代以前に形成されたことが判る。

〈掃木7トレンチ〉

7トレンチは、台地の縁近くに設けた。トレンチの調査面積は24㎡とした(第5図)。

厚さ約15cmの表土を除去すると、2層がほぼ全面に現れる。この2層は赤土で硬くしまっていた。当初この2層が、6トレンチでも見ら

れた地山の遺構検出面と考えていた。ところが大きめの石が若干出土しただけで、柱穴状の穴の痕跡さえなかった。この為若干暗い色調変化が観察されたトレンチの南壁に沿って深掘したところ、2層のより下層に更に数枚の層が観察された。地層断面を観察すると、2層～3b層までは整地層であることが判った。それぞれ黒色土や赤色土の混在の違いに区分できた。3c層は黒色土で旧表土(風化土)と考えられ地山に由来する小さな石粒が微量観察された。4層は茶褐色土。5層は赤土ローム層(火山灰)であった。



第7図 掃木7トレンチ出土状況・地層断面図



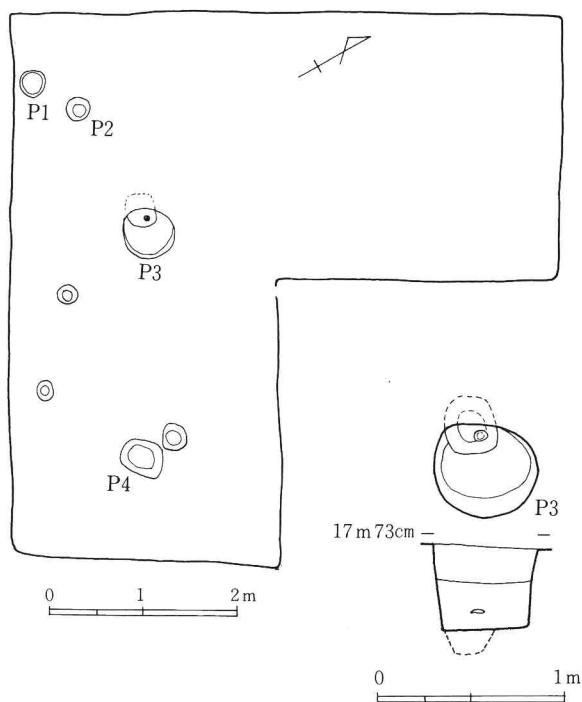
写真6 掃木7トレンチ北壁地層断面
東



写真7 掃木7トレンチ出土状況

遺物は3b層からまとまって見つかった。3b層は、整地の際の廃棄に由来しているが、炭・土師質土器のかけらなどの「~~ゴミ~~」から構成されていた。その分布はさほど広くはなく、楕円形に広がっていることから一括して廃棄されたことが判る。少量ながら、青銅製品、土錘、鉄器なども見つかったが、近世から現代に至る陶磁器片等の遺物は一例も見つかっていない。こうしたことから3b層は近世以前に形成されたことが判る。

遺構は柱穴状の穴と、楕円形の土坑が見つかっている。掘り込み面は3c層上面にあることが南断面に観察された。このことから、3b層の形成とはほぼ同様の頃に掘られたと思われる。最終的な整地層である2層の上面には今のところ観察されていない。



第8図 掃木8トレンチ出土状況図と遺構拡大図

今後、3b層の形成と、3c層上面の遺構が他のトレンチとどのように関連するか、また前後関係の有無を調べる必要がある。

<掃木8トレンチ>

掃木8トレンチは北部の崖際に位置している。柿の木との関係から変則的な「L」字状となり、発掘面積は12㎡とした(第8図)。

柱穴状の穴が6ヶ所、土坑1ヶ所が見つかった。このうちP1～P4は、他のトレンチで見つかった遺構内部の土とはほぼ同じ色調・土質である。その中でP3が若干硬さに違いがあった。P3を注意深く掘り下げてみると、ほぼ-45cm程度で床に達し、ここから再びオーバーハングする状況で深さ15cmの小穴が形成されていた。内部の土を観察すると、検出面から-20cmまでの土はしまっ

るのに対し、-20cmより下の土は若干粘質で多量の焼土・炭が見つかった。こうしたことからP3内部の土は、上部が整地の際の埋土、下部が灰・焼土・炭を廃棄(土坑の壁が焼けていないことと、破損した土師質土器が見つかったことによる。)した結果に由来しよう。

遺物は、糸切り離しの底部をもつ土師質土器の小破片が見つかっている。その他、近世・近代の陶磁器類などの破片は全く見つからなかった。したがって、掃木8トレンチの遺構、遺物もまた近世以前に由来が考えられる。

<掃木9トレンチ>

9トレンチは6トレンチとともに、崖際に設けたトレンチである。そして、

1988年に発掘した1トレンチの北端部と3トレンチを包括させた。これは1トレンチで土師質土器が多数見つかったPit 1、Pit 2、Pit 10などの遺構の広がりを確認する目的からであった。9トレンチの発掘面積は28㎡であった。

発掘の結果、多くの小穴群が確認されたが、その多くは土地所有者の御教示と、土質・出土品から現代のものであることは明らかであった。東断面から西へ1mの間は1988年の調査の1トレンチの範囲でもあるが、再調査の結果、現代の穴とされた数ヶ所の穴が発見物・土質な

どの特徴から近世以前の掘削に由来することが判った（他のトレンチ内遺構との比較から）。更にPit 1・Pit 2・Pit 10（1988年に見つかった遺構）などと同様に穴から土師質土器を多数含んだ穴が新たに見つかった。位置はPit 10の北側に隣接していた。このように、埋納あるいはそれに近い状況で土師質土器が狭い範囲内で見つかるということは、このあたりが特定の機能を有した場所と考えられよう。

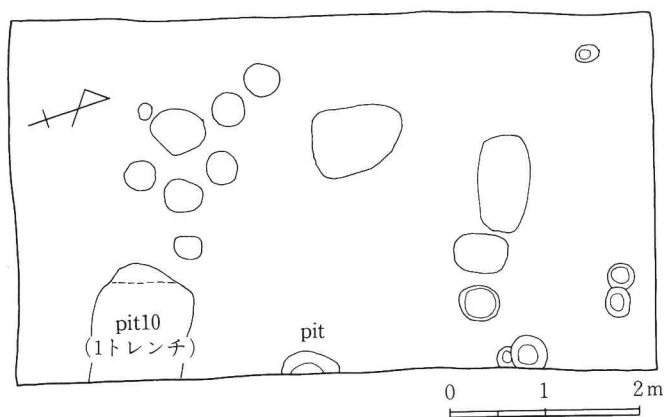
出土遺物は全て土師質土器で、底部を糸で切り離れた例である。こうした土師質土器が見つかった穴から近世・近代の陶磁器など新しい遺物は全く見つかっていない。

近世以前に掘削された大小の穴は、「建物」跡として再構成することができなかった。

以上、掃木1トレンチから9トレンチまでは、東方の低地ら梅牟礼山系側にかけて大小5段ある掃木地区の平地のうち、下から2段目の平地に位置している。



写真8 掃木9トレンチ全景



第9図 9トレンチ検出状況図

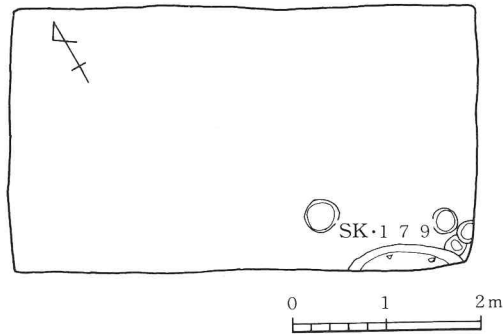
<掃木10トレンチ>

10トレンチは、1トレンチから9トレンチまでを設けた平坦地より2段上位の平坦面に設けた。しかも、崖際の上位に位置させた。その目的は、この平坦面に遺構が観察されるかどうかと言うことと、平坦面の形成時期を詳らかにする為であった。発掘面積は15m²とした。

10cm程度の厚さを有する表土を除去すると、遺構検出面である地盤層になる。地盤は硬くしまっており、平坦に削平されていた。柱穴状の穴が4基、土坑1基（SK-1）を検出した。これらの穴はトレンチの中でも最も崖際に位置している。

土坑は直径約130cm前後で、深さ約20cmの規模を有している。内部には多量の炭と黒色系の土が混在した状況でつまっていた。更に内部の土は硬くしまっていた。

柱穴状の小穴と土坑から見つかった遺物の多くは土師質土器の小破片が見つかっただけである。特に土坑から見つかった土師質土器は、底部には明瞭に糸切り離し痕跡が観察され、しかも器形などから中世に溯ることは明らかである。（綿貫）



第10図 掃木10トレンチ出土状況図



写真9 掃木10トレンチ全景

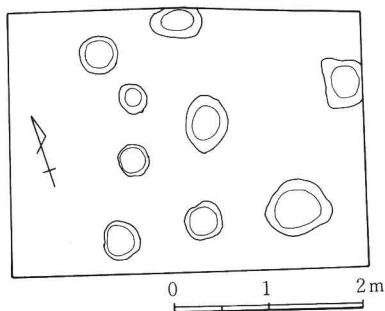


写真10 掃木10トレンチ SK-1

長畑地区

長畑地区は、引地（愛宕神社境内）の居館推定地の北で、掃木地区の東に位置する低地上に位置する。地理学上、扇状地に分類されるゆるい傾斜面上に占地する。細い水流が、引地の平坦地の崖と長畑との境界付近に流れ下っている。一帯は、民家が立ち並んでおり、微地形や地割を詳びらかにするのは困難な状況である。標高は約11mのところにある（第2図）。

トレンチは、民家に囲まれた畑に位置している。その目的は、所謂「根古屋集落」の広がりを探る為である。トレンチ面積は18m²である。約30cmほどの表土を剥くと、黄褐色の基盤層に



第11図 長畑1 トレンチ出土状況

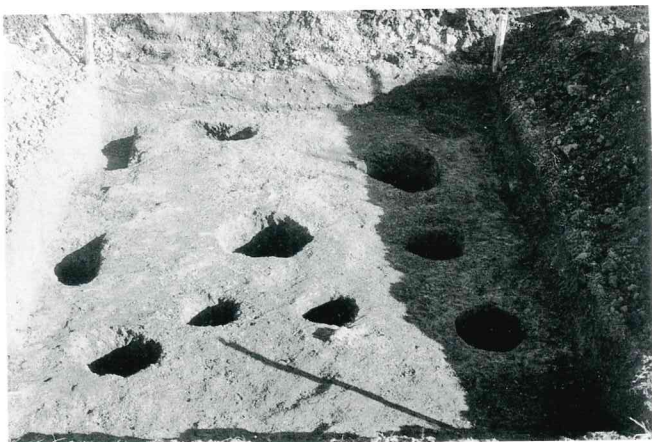


写真11 長畑1 トレンチ全景

由来する層が観察される。この層には拳大の礫を多く含んでいる他、黒色土系の土も若干観察された。こうしたことから、整地層であることが判る。整地層の下位には、旧表土（風化土）が約40cm程度堆積し、更に下位にはローム質状の自然層が堆積する。

遺構は整地層の最上面から掘り込んでいる。発掘面積が広くないので、柱穴状の穴が建物として並ぶかどうかは判らない（第11図）。穴の規模は、直径が35cm～60cm程度の例が多く、深さは50cmぐらいとなっている。こうした柱穴状の穴の規模は、引地下地区、掃木地区の例と比較してみると、長畑地区の例はより大きいことが判る。

遺物は、底部糸切り離しの杯類が表土層の最下部と柱穴状の穴の中から多量に見つかった。

（綿貫）

ひきじ 引地地区出土の
引地地区で見つかった近世の陶磁器

トレンチから出土した遺物には、土製人形・土鍋・鉄製品・陶磁器類がある。時期的には備前焼きの甕の胴部片1が中世と考えられるもので、他は江戸時代とその後のものが主体である。陶磁器類の一部を図示しておきたい。

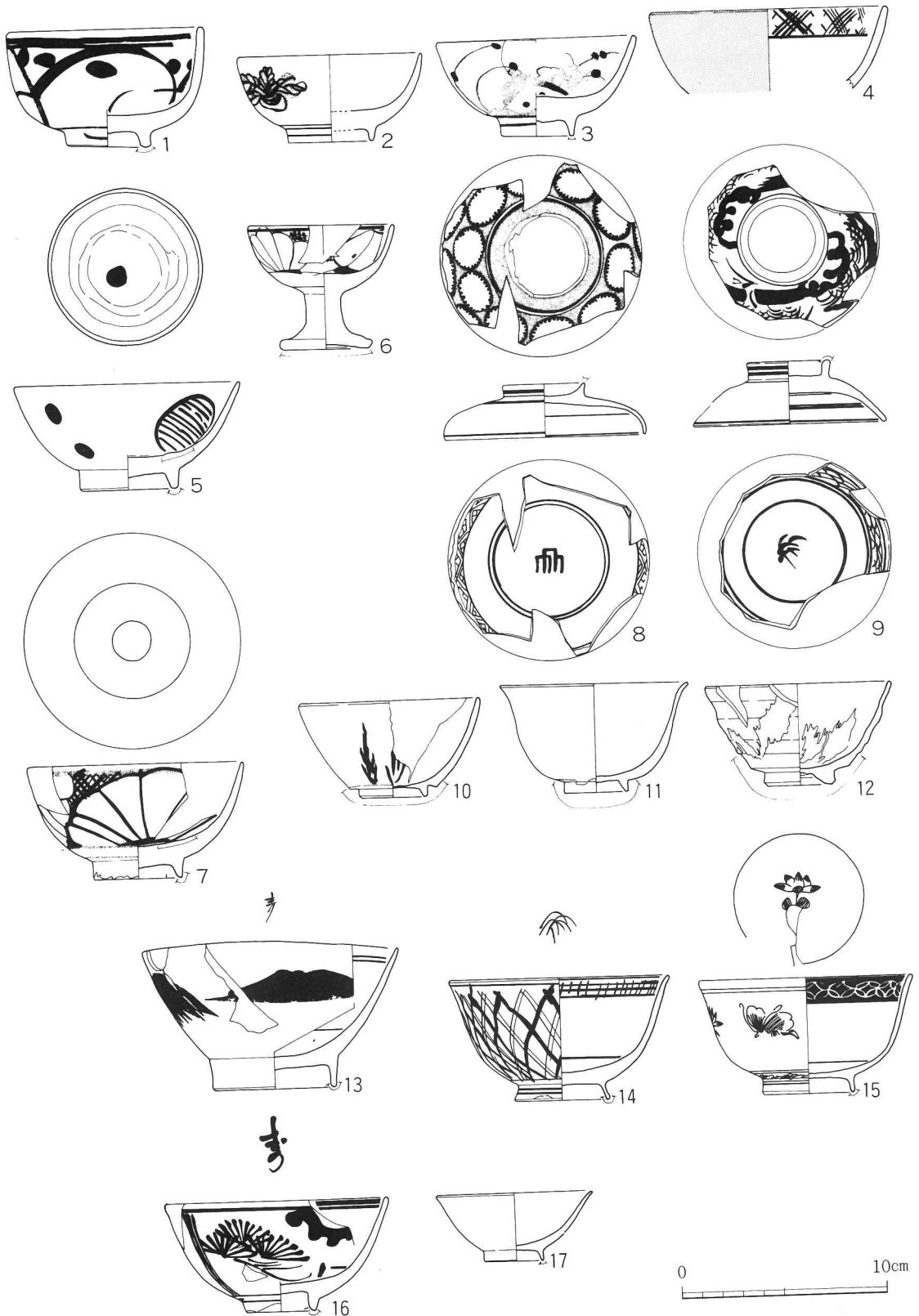
1は陶器の表面に施釉し染付による模様を描いたもの。同様のものが他に1点ある。2は蕪？の絵が3ヶ所ある。コンニャク判は18世紀前半を中心に盛行したものである。5は完形で外面に2点と円文が対になって3ヶ所描かれてい

る。仏飯器は6のほかに1点出土した。9の蓋と対になるものの類例が姫路城侍屋敷^{註1}から出土している。

10・12と同種のもので4・5個ある。^{註2}13は高台が高く器体部が直線気味にのびるものでこれらの類例は旧芝離宮庭園（武家屋敷跡）や郵政省飯倉分館構内遺跡^{註3}（米沢藩・白杵藩の下屋敷跡）から出土している。広東宛とよばれるもの。14・15は器体下部が丸く口縁部が反返り気味のもので端反碗とよばれるもの。14と9の見込み文様は同様であり同一時期のものであろうか？16は

引地地区出土陶磁器観察表

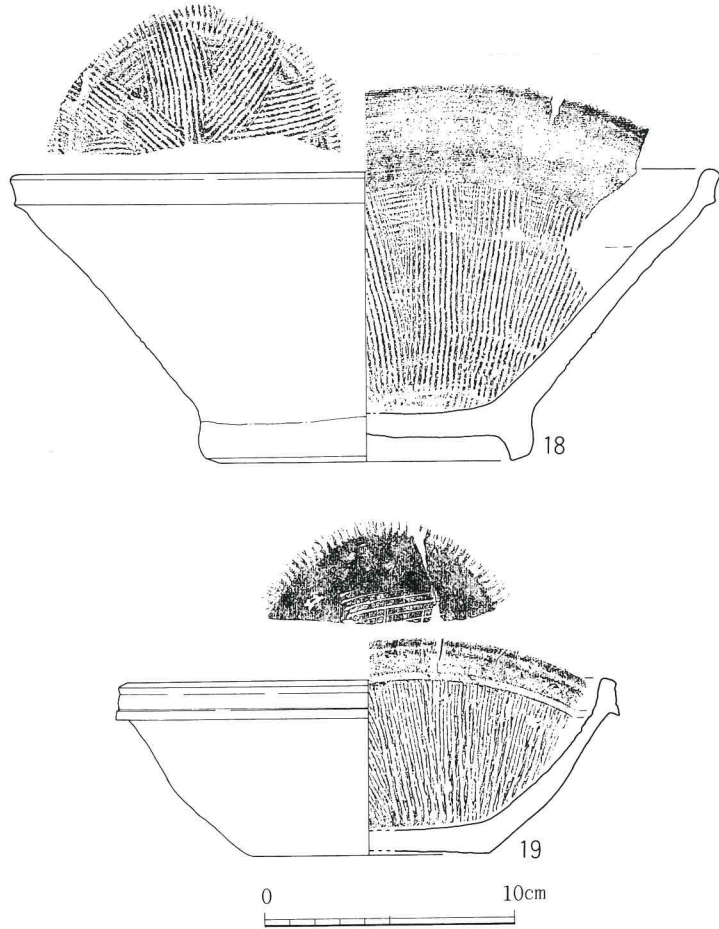
No	細別	口径	器高	底径	施文・調整等	産地・年代
1	陶胎染付碗	9.6	5.85	4.1	畳付部は無釉・施釉部は貫入・草花文	肥前・18C後半
2	磁器碗	9.0	4.25	4.2	コンニャク印判のあと墨描き	肥前・18C代
3	磁器碗	4.9~ 9.7	4.8	3.6	畳付部は無釉・草花文	肥前・18C代
4	青磁碗	11.6			外面は清磁	18C後半
5	磁器碗	11.1~ 11.4	5.3	4.8	見込みに蛇ノ目釉剥ぎと重ね焼き痕	18C後半
6	染付仏飯器	7.1	6.0	4.5	畳付部は無釉・染付けは茶色	18C後半
7	磁器蓋物蓋	10.6	5.55	4.3	見込み蛇ノ目釉剥ぎ・菊花文	18C中葉~幕末
8	磁器蓋物蓋	9.9	2.6	4.1	見込みに源氏香文	18C後半~19C初
9	磁器蓋物蓋	9.35	3.15	4.1	染付の色は外色藍色、内は見込以外は薄色	
10	陶器碗	8.8	4.8	3.4	高台は削り出し、内外面に貫入一對の若松文	京焼系・18C後半代
11	陶器碗	9.2	5.3	3.1	高台は削り出し・内外面に貫入	信楽系・18C後半~幕末
12	陶器碗	9.0	5.0	3.6	高台は削り出し・灰白色釉の上に部分的に鉄釉	萩焼？ 18末C~19C代
13	磁器碗	12.45	6.7	6.0	畳付部は無釉・見込みに寿字銘	18C末~19C初
14	磁器碗	10.8	6.0	4.9	畳付部は無釉	
15	磁器碗	10.4	5.65	4.3		19C初~幕末
16	磁器碗	10.8	5.4	3.4	コバルト顔料・釉色はきわだって白い寿字銘	
17	磁器碗	7.7	3.3	2.9		
18	播鉢	28.3	11.6	13.4	外面高台より上位に施釉	肥前？
19	播鉢	19.8	7.0	9.6	底面のみ無釉・口縁付近のカキ目はナデ消し	備前？



第12図 引地（愛宕神社トレンチ）地区出土陶磁器実測図（ $S = \frac{1}{3}$ ）

真っ白い器体に明るい青の染め付け文様をもつ。明治以降のものと思われる。17も新しい盃である。盃は10点前後出土している。18・19はいづれも拓影に向かって右から左にかき目を施している。18は肥前系、19は備前系であろう。時期は不詳だが、多分1～15の陶磁器類と重なるものであろう。

トレンチから出土したもののうち図示しなかった備前焼甕の胴部をのぞいて中世にさかのぼるものは認められない。最も古いもので18世紀の前半までであり、以後断続的に現在まで遺物の堆積が続いているものである。(高橋)



第13図 引地(愛宕神社トレンチ)地区出土播鉢実測図

- 註1 「国内出土の肥前陶磁」佐賀県立九州陶磁文化館 1984
- 註2 「旧芝離宮庭園」旧芝離宮庭園調査団 1988
- 註3 「郵政省飯倉分館構内遺跡」港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986

掃木地区出土の

掃木地区で見つかった土師質土器・青磁、土錘・青銅製品

1、2とも土師質土器の小皿である。3は坏である。

1は6トレンチ5ピットからの出土で、口径6.8cm、器高1.7cmをはかる。平底から外反し、少し尖り気味の口縁部にいたる。底部糸切りである。2は8トレンチ5ピットの出土で、口径6.8cm、器高1.9cmをはかる。平底から外反し、二等辺三角形を呈する口縁部に至る。底部糸切りである。3は坏で、底部より外反しながら立ち上る。これらの土師質土器は、臼杵石仏群地域遺跡に類例が求められ、15世紀から16世紀にかけてのものと思われる。また1988年に行った試掘時⁽²⁾にも出土している。(メ野)

青磁・掃木地区6トレンチ(第14図4)

口径32cmを測る。内湾気味に立ち上る胴部が外方に屈折し口縁にいたる例で、口縁は波状を呈する。外面体部にも縦縞状文が入り、内面は

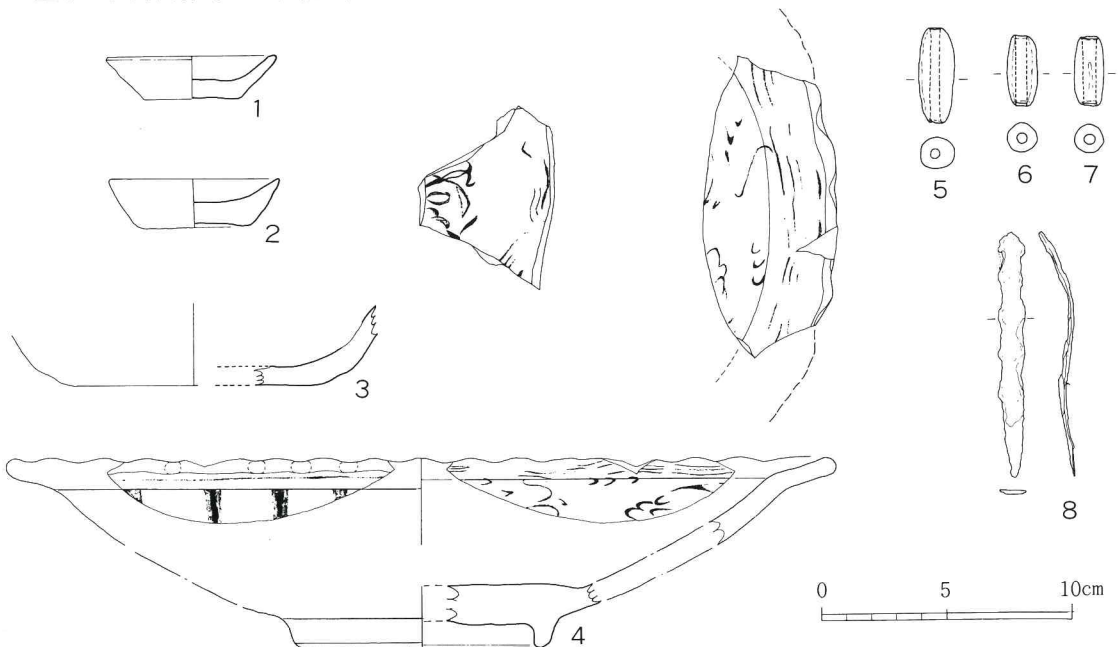
ヘラによる文様を施す。釉は淡緑色で光沢があり、厚く施釉される。類例は伐株山城跡で見つ⁽³⁾かっている。

土錘・掃木地区7トレンチ(第14図5、6、7)

管状土錘で、5は全長3.8cm余、中央部直径2.4cm、内孔径0.4cm、重さ6.9gで、6は全長2.85cm、中央部直径1.2cm、内孔径0.4cm、重さ3.8g、7は全長2.8cm、中央部直径1.15cm、内孔径0.5cm重さ3.6gである。色調はいずれも赤褐色。

青銅製品・(掃木地区7トレンチ)(第14図8)

長さ9.7cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ3.7gである。先端部は尖っているが、頭部は剣頭形をしている。頭部付全長の3分2までは、拇指状の打ち敲き痕が5ヶ所残る。かんざしの可能性⁽⁴⁾がある。(綿貫)



第14図 掃木地区の遺物

長畑地区出土の
長畑地区で見つかった、土師質・瓦質土器

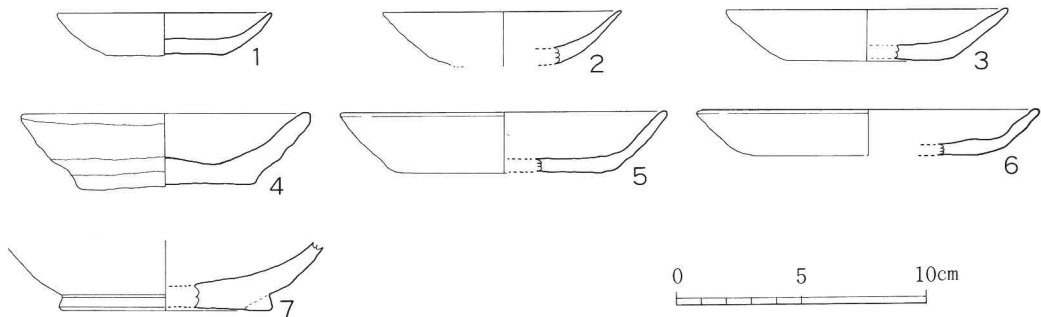
第1トレンチから土師質の皿・杯・瓦質土器が出土している（第15図）。

1～3は4ピットからの出土である。1は、口径8.6cm器高1.7cm弱。平底より外反しながら立ち上がり直線的に口縁にいたる。底部糸切りである。2は、口径9.6cm。底部丸底と思われる、底部より外反して立ち上がる。体部でやや内湾し、口縁端部で再び外反する。3は、口径11.4cm器高2.1cm弱。底部より外反しながら立ち上がり、そのまま口縁へとつながる。4は5ピットからの出土である。口径11.6cm器高2.9cm。底部から口縁部まで同じ壁厚のもので、底部より外反して立ち上がる。底部糸切りである。5・

6は6ピットからの出土である。5は口径13.1cm器高2.4cm。底部より外反して立ち上がり、体部は比較的シャープで直線的に口縁につづく。6は口径13.7cm器高1.8cm。底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部にいたってやや外反する。7は9ピットからの出土で瓦質土器である。底径8.2cm。内面は黒色研磨がほどこされている。高台は貼り付けである。

これらの遺物は12世紀から16世紀にかけてのものと思われる。1は菊田徹氏編年のⅧ式にあたると考えられ、16世紀後半である。7は古手の様相を呈するが、高台の形状の類例は他に求められない。（メ野）

- (1) 菊田徹 1983『臼杵石仏群地域遺跡調査報告書』臼杵市教育委員会
菊田徹 1986『東九州における中世土師質土器の様相——杯・皿形土器を中心として——』（専修考古学第3号）
- (2) 佐伯市教育委員会 1988『梅牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅰ』『佐伯地区遺跡群発掘調査概報』
- (3) 内恵克彦・後藤一重 1987『伐株山城跡における表面採集の遺物について』『玖珠郡史談』第18号 玖珠郡史談会 P31～45



第15図 長畑地区の遺物

まとめ

1989年の発掘調査で判ったことは次の通りである。

<遺物> 佐伯氏が活動した時代に用いられた遺物の多くは糸切り底部の土師質土器がほとんどで、青磁・瓦質土器・その他の遺物はわずかであった。調査を行なった居館推定地の引地（愛宕神

社境内)では、備前焼の甕破片が一例出ただけで、その他中世に由来する遺物は見つからなかった。

引地下地区では、柱穴状小穴から糸切り底の底部をもつ土師質土器小破片が数十例見つかったが、器形の特徴が判る例はない。しかし、中世の幅の中で理解できるものである。

掃木地区の平成元年度の発掘調査では、平底から外反し、二等辺三角形を呈する口縁部の小皿がある。杯の特徴は、底部から外反しながら立上がる例である。15世紀後半から16世紀前半に位置づけられた臼杵石仏群地域の類例がある。平成元年度の成果から見ると15世紀後半から16世紀にかけての年代幅をもつ遺跡と見られる。

長畑地区1トレンチでは、丸底～平底から外反しながら立ち上がり、口縁へとつながる例や、体部が比較的シャープで直線的に口縁へつながる例である。こうした例は16世紀後半に位置づけられる例である。瓦質土器は、内面黒色研磨で貼り付高台を有する古い様相の例である。この他、大宰府編年で13世紀から14世紀に位置づけられている龍泉窯系の青磁鉢が見つかっている。

以上、見てきたように掃木及び長畑における遺物の時期は15世紀後半から16世紀代に位置づけられる例が中心であった。江戸時代の初期に書かれた大友興廃記や梅牟礼実録を見ると1527年(大永7年)に佐伯惟治によって築城されたとある。遺物はほぼそれに対応する年代であると考えられる。一部、~~瓦質土器が~~^{の土師質土器が}16世紀以前の可能性もあることから1527年以前の「根古屋集落」との関連が考えられるかもしれない(第15図7は12世紀に溯る可能性がある)。

<遺構> 遺構としては、柱穴状の小穴が大半であった。それらは、引地下地区、掃木地区・長畑地区で検出した。小面積のトレンチ調査であった為に、建物として復元することはできなかった。しかし、柱穴状小穴内には多量の土師質土器片が密集していたり、柱痕が観察される例が多いことから、中世の建物に関連する可能性は高い。

柱穴状の小穴が見い出された「引地下・掃木・長畑」のうち、引地下と掃木地区は段々畑や河岸段立状地形上に占地している。崖上や崖下に設定したトレンチ内から柱穴状小穴や土坑が見つかったことと、トレンチ内に観察された火山灰層の分布状況・堆積角度から見て自然地形ではないことが判った。明らかに自然の傾斜面と考えられる部分から延長させてみると、柱穴状の小穴は2m～3mの不自然な深さに位置することになる。自然地形面から2m～3m以上の柱穴状の小穴を掘ったということは考えられない。したがって平坦な地形自体が遺構となる。15世紀後半～16世紀にかけての人々が自然地形を削平して、建物を建てた結果として柱穴状遺構が形成されたと言える。

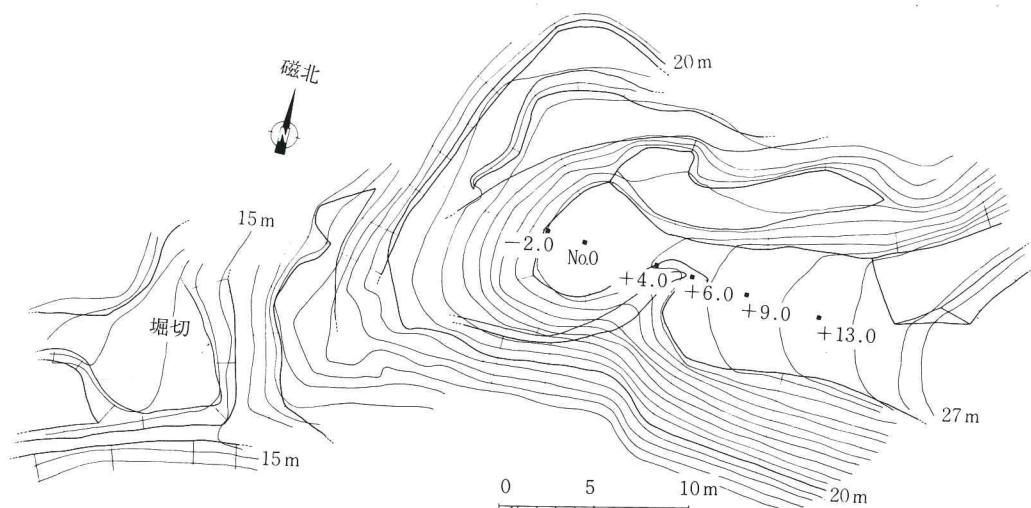
<結> 居館跡と推定されてきた引地(愛宕神社)においては中世遺物や遺構はほとんど出土しなかった。しかも、引地は広い平坦な地形であるにもかかわらず火山灰は観察されず、削平面が観察された。これは、引地という小字の示すように削平に由来していることが判った。

今回の調査で、低地の長畑地区にも柱穴痕が観察されたことと、更に東北部に存在する「土井の内」という小字との関係からこのあたりに居館址を推定することも可能であろう。

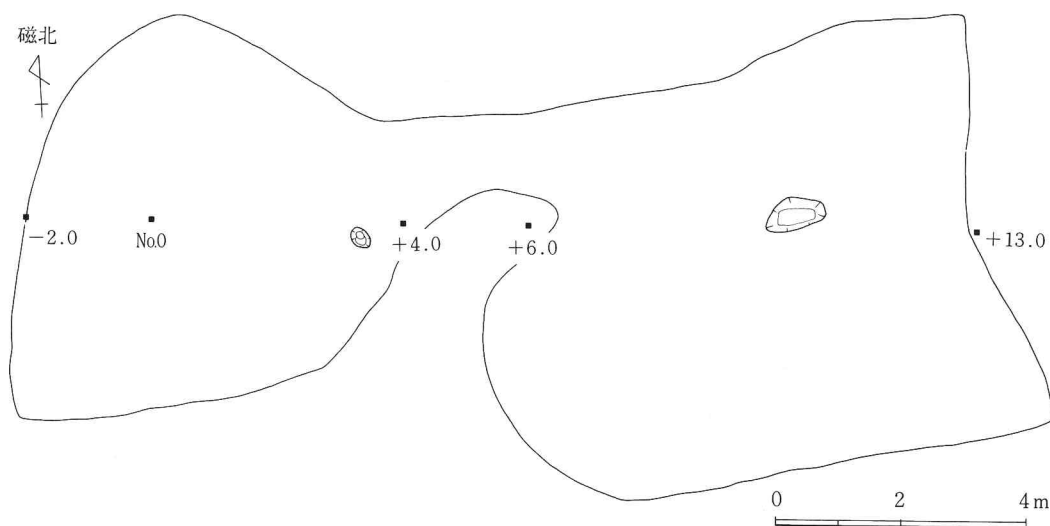
宇山城の発掘調査

宇山城は、佐伯市大字堅田字垣ノ内・上ノ山・城ノ越にある。南側を堅田川が、北方350mに大越川が東流する。宇山城は西方の山系から堅田平野に突出した尾根上に占地する。城の西方が「城ノ越」と呼ばれ、尾根がくびれ、標高も低い。この付近に山道が通っている。城が立

地する尾根の南崖面は、かつて堅田川に浸蝕されたとらしく90度近い絶壁となっている。北側はやや急斜面となっている。南の崖と北の急斜面の横断面形は、~~円形を4分の1にカットした形~~
~~丁度扇形の直線部の一辺を底辺~~
~~とした形をとる。~~北側斜面の北側には湿田（字道ノ下・井ノ尻・渡熊）が谷底に広がっている。



第16図 堅田宇山城調査区付近（字城ノ越）測量図



第17図 宇山城発掘調査区平面図

城域は、長軸約400m、短軸約100mの尾根であるが、山陵の平坦部の短軸が約20mとせまい。低地との比高は約41m。

歴史上の宇山城は、嘉吉元年(1441)に大内勢の堅田侵攻と、天正14年(1586)の島津の堅田侵攻の際に佐伯氏の拠点になっている。そして、いずれの合戦も撃ち退りぞけているが、平時の居館と考えられるところが、北側の谷を隔てて対面する尾根上にある。尾根は平坦に削平されており、小字を上^テ台、上ノ屋敷(長良神社境内)と呼ぶ。周囲には関連する地名として、御供田、馬場、ハサマといった小字が残る。

発掘調査は、宇山城主郭から尾根に沿って西方向へ約120m下った場所で行なった。このあ

たりは、宇山城の縄張りの外れで「城^{しろ}越」と呼ばれている。発掘に至るいきさつは、長良付近の水田への灌漑施設を標高約20mのところに設置する必要からである。

発掘調査の結果、表面から約10cm掘り下げたところで基盤にあたった。この面を調査したところ、柱穴等の遺構は見つからなかった。調査した地点の景観は、明らかに尾根上を削り出して平にしている。更に北側傾斜面には、犬走り^{イヌソリ}が数段ある。また西側の尾根続きで最も凹んだところには、堀切がある。ようするにこうした景観自体が城郭遺構と言える。遺物等は、若干の近・現代陶磁器が出土しただけで、中世に遡る例はなかった。

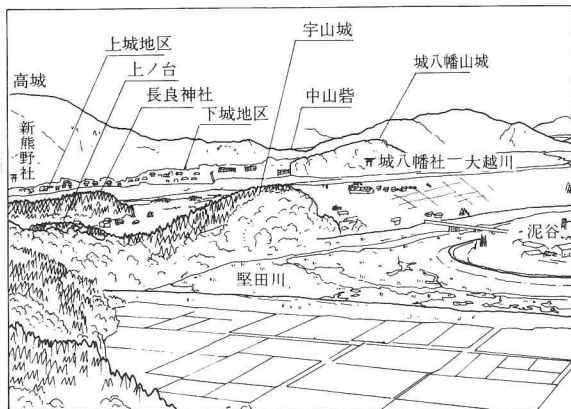


写真12 長池地区の山中から望んだ中世堅田地区の中核(南から北を写す)



写真13 宇山城調査区近景

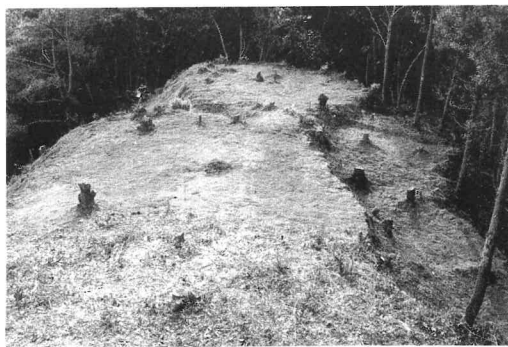


写真14 宇山城調査区近景



第18図 宇山城地形図 (○発掘調査地点)

梅牟礼城を踏査して

海老澤 衷

1984年7月9日に小野英治氏のご案内にて調査して以来、今回二度目の踏査となった。

前回は西斜面から上り主郭に至ったが、今回は東斜面南端の武者溜に至り、そこから北上するコースをとったので、以前とはだいぶ違う印象を受けた。以下気が付いた点をまとめて記しておきたい。

(1) 郭Ⅲ南側斜面の豎堀

この三連の豎堀は大型でかつ重厚であり、武者溜ⅤからⅡにいたる尾根上の四条の堀切が直下に掘り進められた分と併せて、高い防御力を有しており、景観的にも大きな特徴をなしている。豎堀の造築は単に防御能力を高めることを目的としたものでなく、造形的な表象としての意味が込められている。山城としての存在をアピールするのが、豎堀の一つの役目であったと考えられるが、梅牟礼城跡の場合、周辺を整備することによってそれを実証することが可能である。

(2) 武者溜Ⅶ東側の二重堀

肥後国では二重堀が一般的にみられるが、豊後国においては事例があまり多くない。そのような中でこの二重堀は深くかつ急峻で、防御施設としての価値はきわめて高いといえよう。

(3) 戸上周辺の防御施設

郭1から戸上にいたる尾根には間隔をおいて二条の堀切があり、一応の配慮がみられるが、戸上から天神ノ尾に至る尾根筋には防御施設が確認できず、天神ノ尾東南の豎堀の防御的位置づけが明瞭でない。

この城は、佐伯氏退去の後、一般に慶長6年から慶長9年まで、佐伯藩主毛利氏によって使用されたといわれる。しかし、今回概観したところでは、近世の造作を見いだすことはできなかった。豊後国においても、例えば玖珠郡の角牟礼城のように豊薩戦争の際、~~攻防~~戦が行われた点梅牟礼城と共通点がある。^{の、攻防戦}戦国期に使用され、その後近世初頭に改変されたものがある。しかし、梅牟礼城の場合には顕著な改変が見られず天文年間から天正15年に至る豊後武士団による築城の一典型と見なすべきであろう。縄張りのスケールの大きさと相俟って、この国における築城技術の到達点を示すものの一つである。

(早稲田大学文学部講師)

佐伯惣領家の居館について

佐伯氏は大神系緒形氏の流れをくむ豊後生え抜きの武士で、海部郡南部一帯に支配圏を有する、最も有力な半独立的な在地領主であった。それ故に領国の安定的支配をめざす大友氏にとって、無気味な佐伯氏の存在は無視できず、ついに大永7年(1527)大友義鑑は佐伯惟治の誅伐を断行したほどである。ここでは、佐伯惣領家の居館について考えてみたい。

居館に関する史料は全く存在しないが、『佐伯市史』はその推定地として、①堅田地区長谷の高城、②堅田地区長谷の上の台、③鶴山古城、④弥生町上野地区上小倉、⑤鶴岡地区古市、⑥上岡付近といった諸説を紹介している。堅田地区は弘安8年(1285)「豊後国岡田張」によると、庶流堅田氏の本拠地で、惣領家とは関係がないように考えられる。しかし、惣領家が庶家の所領を押領・買得・恩賞などによって手に入れることもありうるため断定はできない。現在では推定地として、古市・上岡付近と弥生町上野地区の上小倉・井崎・山梨子付近が、最も有力視されている。弥生町上野地区の上小倉には磨崖宝塔があり、嘉暦元年(1326)から康永4年(1345)にかけて製作されたもので、その銘文に大神惟武・惟覚らの名が見える。⁽¹⁾惟武は「大神姓佐伯系図」により庶家の出であることが確認でき、恐らく惟覚も同様の出自であったと推定される。つまり、この造立者は惣領家とは無関係ということになる。

惣領家の居館は時代によって推移することも

乙 咩 政 已

十分考えられるので、ここでは梅牟礼城築城以後に焦点を絞って考察してみたい。梅牟礼城がいつ頃築かれたかは不明であるが、伝承では大永年間に築城されたといわれている。文献史料によると、大永7年佐伯惟治は大友義鑑が派遣した軍勢に対し、籠城して抗戦していたことが窺える。一般的に居館は山城の麓に構えられることから、梅牟礼城の場合、地形的にみて、東・西・南側のいずれか一方に存在していたことになる。南側は番匠川、西側はその支流の井崎川がめぐり、それぞれ山手側の土地は狭小であるのに対し、東側は比較的広く地形的にみて居館を設けるのにふさわしいように思われる。

居館の所在地を推定する方法として、佐伯氏に関する文献史料・居館伝承地・地名及び文化財等から捉え直す必要がある。いずれも先学諸兄によって考証されているが、改めて私なりに再考してみたい。文献史料としては、当時の史料が現存せず、「大友興廢記」「梅牟礼実録」などの後世の編纂物に頼らざるをえない。それらによると、惟治は先祖祖母嶽大明神を佐伯迫田に勧請し、その外にも大宮八幡宮・祇園の宮・白山一の宮・二の宮・上の宮・下の宮を建立ないし再建、龍護寺を再興し菩提寺化は、近くに居館があったことを示唆する重要な手掛かりである。前者については、「迫田」の小字名が佐伯市大字上岡にある。もともとここに社殿が建立されていたが、明治13年に今熊野神社に合祀されたため今は現存しない。旧社地は愛宕神社

の南側、木戸城の北側近くに位置している。後者は番匠川を狭んで南側対岸にあり、伝承では大神氏の家臣によって創建され、廃絶後に惟治が再興したようである。地名の上では、愛宕神社（居館推定地）の北東300mの地点に、「土井ノ内」という小字名が残っており、居館であった可能性も想定される。また、神社の近くの南東方向に「古市」という小字名もあり、ここは早くから市が営まれていたといわれ、いわば商業の中心地であった。文化財の上からみると、鎌倉期を下らないといわれる凝灰岩製十三重層塔の存在は無視できない。これは昭和26年の台風によって基部から倒壊し、その復元前の詳細な調査で、塔直下及びその周辺から10余個の陶製蔵骨器が発見されている¹²⁾。佐伯氏が造立したという伝承があり、佐伯氏に關係する唯一の墓地と推測される。この西側には木戸城があり、野史によれば惟治亡き後、甥の佐伯惟勝がここに居住し、伊予から佐伯に渡って来た弟惟常がこの城を襲撃したとしている。惟常は大友義鑑から正式に佐伯氏の跡職を与えられたものの、兄が納得せず一早く佐伯を本拠としたため兄弟抗争へと発展、義鑑も惟勝支援を打ち出すにいたり、彼は再び伊予へと退去したようである。惟勝の居館は木戸城ということになるが、兄死去後に惟常は佐伯へ戻り、この城を踏襲した可能性もありうる。ここで、惟常が伊予と佐伯の間を往復していたことも、あわせて着目すべきであろう。この点、惟教（惟常の孫）も弘治3年(1557)6月姓氏の抗争で義鎮を恨み伊予へ出奔、永祿12年(1569)大友家から許され佐賀郷烏帽子岳城番を勤め、元龜元年(1570)頃佐伯梅牟礼城にもどり、同3年大友宗麟は彼を総大将

として豊後水軍を率いて伊予の西園寺公広を攻略させている。また、天正7年(1579)7月21日、島津与党の南九州の水軍が佐伯木立の入江に侵入した際、惟定（惟教の孫）が追撃し数十艘を撃退している¹³⁾。佐伯氏は海に近い位置に居館を構え、浦人を組織して強力な水軍に編成していたのである。次に伝承によると、愛宕神社（祭神は軻遇突智神）の鎮座地は、従前から佐伯氏の居館跡とされている。全国愛宕神社の根本社といわれる京都の愛宕神社では、地藏菩薩を祭神の本地仏として安置し、勝軍地藏と名づけ、崇奉すれば必ず勝利が得られる称していた。佐伯氏は豊後最大の国人であり、武士として軍神を居館に勧請したとしても何ら不思議なことではない。この近くに「ハワキノカミンヤシキ」（深田伯耆守屋敷）という伝承名も伝わっており、深田氏は佐伯氏の有力な家臣で、主君の近くに屋敷を構え仕えていたのであろう。梅牟礼城と対面する東側山上には惟治の魔法伝授の師、僧春好が修行したという三上寺（山上寺）があったと言われている。もう一つ見逃せないのは、昨年度の概報でも指摘しているように、山城の縄張りは確かに東麓に居館があったことを意識して築かれていることである。

以上の諸点から、佐伯氏惣領家と密接に關係する伝承・文化財等は、いずれも梅牟礼城の東側に集中し、それは居館の存在を間接的に裏付けるものである。最後に、この地域における居館候補地を挙げるならば、①愛宕神社、②木戸城、③「土井ノ内」の三ヵ所に絞ることができそうである。しかし、②は梅牟礼城の出城、③は一族か家臣の居館とも推定され、やはり①が最も有望である。今後は在地領主の手作地で居

館の近くに営まれたと想定される、門田・佃・等の詳細な聞き取り調査による解明に期待した垣内・堀之内などの字名や俗称、及び伝承地名い。

(宇佐市教育委員会)

<註>

- (1) 小田富士雄「豊後・南海部郡の磨崖石塔群」(『九州考古学研究歴史時代編』学生社 1977年)
- (2) 小田富士雄「大分県の火葬墓」(『九州考古学研究歴史時代編』学生社 1977年)
- (3) 「大友家文書録」(『大分県史料』第32巻大分県教育委員会1980年)、橋本操六「佐伯氏の終焉」(『佐伯氏一族の興亡 中世の秋に拾う』佐伯市教育委員会 1989年)
- (4) 「大友家文書録」(『大分県史』第32巻大分県教育委員会 1980年)

常楽寺の鰐口

1 常楽寺は、佐伯市大字堅田^{なんご}の波越の集落内にある。西方300m堅田川を、北方250mに波越川を臨む場所に位置する。背後の山系からのびる尾根が、沖積地からの比高約3mのところでは舌状の台地になっており、その平坦な場所に占地する。背後の山は山林、前方の沖積地は水田に利用されている。

2 佐伯市史を見ると、山号・寺号は仏徳山常楽寺で禅宗とする。また、創建年代は不明であるが、境内にある板碑に応永2年(1395)、六世現住玄陽と文字が刻まれている(傍点筆者)。機械的に~~一世代が仮に10年とすると、一60年で1335年頃(建武3年)の創建となる。~~ ^{1335年頃(建武3年)の創建となる。いずれにしても室町時代初期に溯る可能性がある。}

3 鰐口は神社・仏閣の正面軒先につるし、紐で打ち鳴らす梵音具である。常楽寺の鰐口は、現在、佐伯市指定文化財となっており、市教育委員会社会教育課が保管している。銅鑄造。

鰐口は、上盤と下盤を別々に鑄造して合せ完成させている。鑄造の際、上盤と下盤それぞれに一つづつ紐が鑄出されるようにしている。つまり、上盤と下盤を合せた後、合い目に後から紐を付けているわけではない。そのどちらか一方から二つの紐を観察すると、一つは凸面、もう一つは平坦な面という関係になる。これは逆の面から見ても同様な関係である。紐の断面形は半円形で、その厚さは約1.5cmである。

耳は片面づつの鑄出しで、側方から観察するとほぼ円形である。両側の耳間の隔たりは39.7cmである。直径は37.4cmである。外圏線が二線、内圏線が二線、中圏線は子持三線となり、

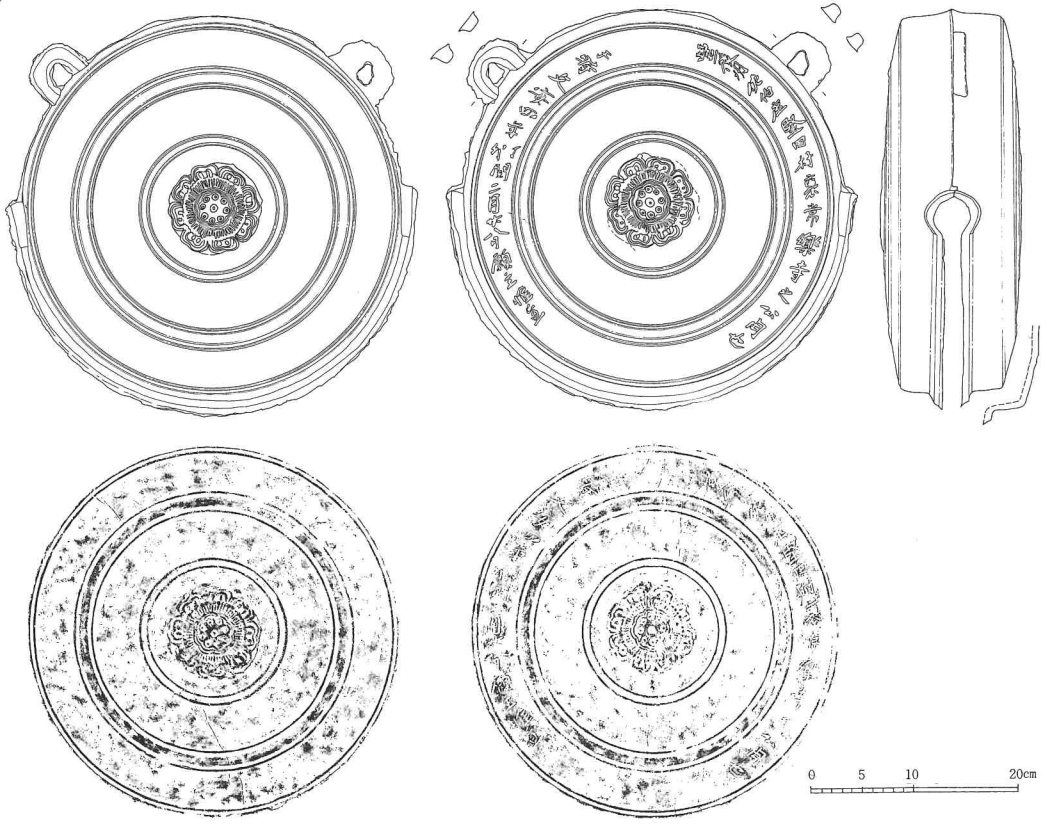
これらの線によって銘帯区・内区・撞座区に分かれる。上盤と下盤の頂点間の隔たりが13.7cmである。重さは、13.2kgあり、これに重さ200gの付属金具(鉄)二つが鈕と組み合わさる。

撞座には、有子葉複弁八葉蓮華文がある。連弁は二重になっているが、外側線は間弁がつながっている可能性も考えられよう。更にその内側には蓮弁が菊花文状に細弁化しており、約60弁ある。中房は、八花状に二重の圏線で区画される。そして八花に対応するように更に内側に蓮子が八つあり、そして最も中央にも一つある。蓮子は円形で、凹んだ中からの凸出部が出ている。以上、瓦の内区や中房にあたる部分の状況、上盤、下盤とも変わらない。

次に、目・肩・唇について簡単に記しておく。両側面に観察される目は楕円形や多角形の外形ではなく、円形である。肩の形状は、上盤と下盤のつなぎ部でわずかにもり上がるが、直線に近い弧を描く。唇の形状は側方からみると、片刃状であるが、端部近くの内部に稜があり、肩部と同じ部位にのびている。

右銘帯には、「豊後州佐伯庄堅田村哀常楽寺之公用也」とある。こうした文字のうち、州と佐、庄と堅、村と哀、哀と常、寺と之、之と公に、若干字の大きさ、字の間隔が異なっており、節ごとに文字の大きさを考慮していることが判る。左銘帯には、「于時文字四年丁卯閏二月廿八日願主惟直」とある。こうした文字のうち、時と文、年と丁、丁と卯、卯と閏、日と願に、若干字の大きさ、字の間隔が異なっており、やはり節ごとに文字の大きさを考慮している。

大神姓佐伯氏系図を見ると「惟直」は、初代・惟康—二代・惟朝—三代・惟忠—四代・惟久—



第19図 常楽寺の鏡口
 - 29 -

五代・惟直（佐伯弥四郎正直）と、初代惟康—二代・惟朝—惟直（左衛門尉）、また初代惟康—惟益—惟連—惟勝—惟綱（高畑六郎、左衛門尉。三河守）—惟直（掃部。左衛門尉）と続く三つの流れにその名がある。最初の惟直（佐伯弥四郎政直）は、1285年（弘安8年）に大友頼泰が幕府に提出した「豊後国田代注進状案」に、「本莊百二十町、地頭御家人佐伯弥四郎政直法名道精」と登場する。したがって1447年（文安

4年）製作の鰐口に見られる惟直とは、年代差が大きいことから別人であることが判る。また最初の惟直が初代から数えて五代目であることと、二番の流れの惟直が初代惟康から三代目であることから、両者ほぼ同世代か、後者のほうが年令が上と考えられる。このようなことから、最後の例の惟直が現状では可能性が高い。

ともあれ、「惟直」の活動年代の一点を知る史料としても常楽寺の鰐口は価値が高い。

（綿貫）

掃木出土の菩薩形立像

発見の由来と流転

菩薩形立像は、「大魏太和元年」銘の仏像と判に佐伯市大字稲垣小字掃木で溜め池の造成中に見つかったと伝える。溜め池は、明治二十二年に作成された字図に概に記載されており、それ以前に造成されたことが判る。昭和30年代に90才前後で亡くなった木許^{きもと}弥太郎の父である木許判吉氏が造成の際に入手したらしい。その後、弥太郎氏からパン屋を経営していた松岡某氏から「大魏太和元年」銘仏像の方は中村義雄氏の手へ渡り、現在の当主である中村義彦氏が保管するに至っている。一方、菩薩形立像はやはり木許弥太郎氏から松岡某氏に移り、更に西村某氏の手を経て元県議会議員河村武吉氏に移り現在に至っている。河村氏は昭和20年代の終り頃、西村氏から手に入れている。

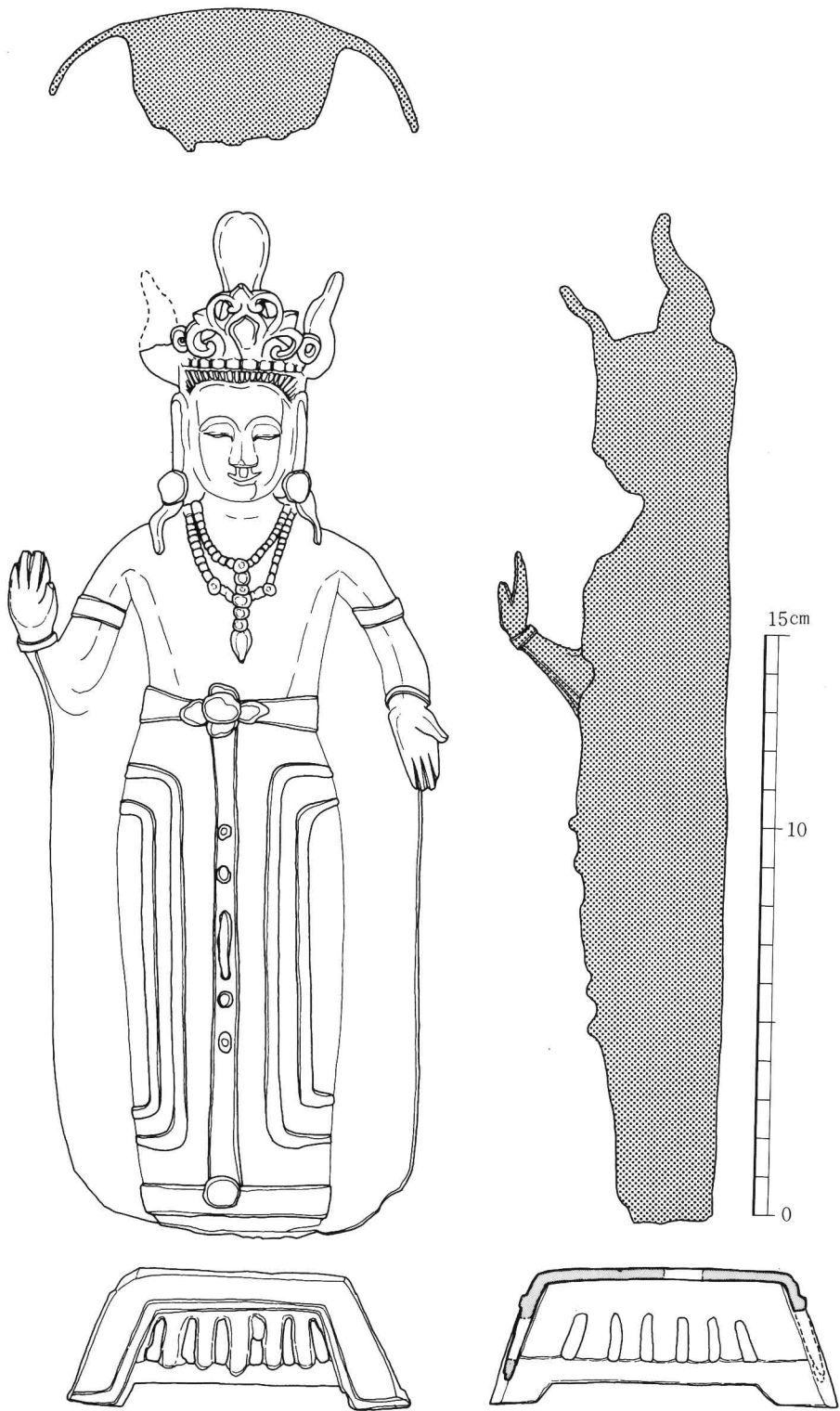
実はこの菩薩形立像の存在は、1988年に掃木の発掘を行なった際、地元で榎牟礼城の研究を続けられている藤田喜代一氏からおしえていただいたことで初めて知った。その後、1989年

の掃木地区の発掘調査の際に藤田氏に御同道をお願いして河村氏所有の菩薩形立像を拝見することができた。ここで初めて筆者は菩薩形立像が仏に形をかりた「マリア」像であることを知った。藤田氏は、生前の中村義雄氏と懇意にしており、その頃に菩薩形立像が掃木の溜め池造成時に見つかったということを書いている。後継者である中村義彦氏も義雄氏（父）から同じことを聴いていることがわかったが、購入（義雄氏）の際に、掃木で見つかった二体（菩薩形立像・大魏太和元年銘仏像）の内、銘のある方を選んだということも聴いている。

現在、菩薩形立像（マリア像）は直川村在住の河村武吉氏・清氏が、大魏太和元年銘仏像は佐伯市在住の中村義彦氏が大切に保管されている。

形の特徴と規模

頭頂部に杓子状の宝髻が観察されるが刻目は無い。二つのパルメット文を三角形に組み合わせたものを宝冠とする。しかも、古式の様式であ



第20図 菩薩形立像（マリア像）実測図



写真15 菩薩形立像（マリア像）

る「山形宝冠」を採用している。宝冠は側頭部には及ばない。両側頭部には、明王部などにみられる焰髪に以た角状の突起物がある。宝冠の下には地髪部があり、29か30の刻目がある。耳は、耳朶がわずかに後方にそる。更に、耳朶の端部に単純で素朴な円形の耳璫が両側にある。垂髪は、両肩頂部で「く」の字状に屈折し、肩頂部の直下（正面）に垂下する。

瓔珞は、首から胸上部にかけて馬蹄形に垂下させた二条の連珠を基調とする。上位の連珠からやや大きい玉を下位の連珠と接続させながら垂下する。更に垂下した縦連珠と下位連珠との交点を中心に、その両側に間隔をおき大きい玉をつけてクロスを表現する。

腕には腕釧・臂釧が見られる。肩部からマントも羽織り、腕釧のところから足元まで垂直に垂下させている。腹にはベルトが見られ、中央に花卉状の腰帯がある。腰帯から足元まで紐帯が延び、表面にボタンが五つ観察されるが、こうした服装の特徴は16世紀末から17世紀にかけての西洋にも見られる。以上本体は、宝冠・装飾・印相（施無畏・与願印）等仏像の特徴をもつことが判った。西洋的な特徴も多く見ることができた。台座は、礼盤座の一種と考えられ、200gの重さで高さは3.6cmである。本体は高さ26.4cm、重さ1.22kgである。本体・台座ともに銅製。

（綿貫）

銅造菩薩形立像（マリア観音像）

渡 辺 文 雄

1 材質

銅製、鑄造、両手先および台座は別鑄。

2 像容

頭頂に高く髻を結び、パルメットを透彫りした前立のある宝冠を冠る。髪は手筋を刻み耳後から両肩に垂らす。丸顔の面部には、やや大振りの鼻、切れ長の眼、小振の引締った口元を刻み、観音像に近い神秘的な微笑を湛える。臂釧・腕釧をつけた両腕はやや開き気味に垂下し、右肘を曲げて施無畏・与願の印相をとる。やや抑揚に欠ける体部は、胸前に二重の鎖にクルスを取付け、花卉状の前飾りのある腰帯からT字状に紐帯を垂下させる。背面両肩から足下までマ

ントに以た肩衣を纏う。

所見

髻を結び、宝冠を付け、施無畏・与願の印を結ぶなど、基本的な形制は仏教尊像のかたちを示す。しかし、胸前のクルス・マント状の肩衣・腰帯・紐帯のついた服制など西洋とくにキリスト教的な要素も多々みられる。恐らく、観音像など仏像にかたちを借りながら、実はキリスト教的礼拝の対象として意図製作されたものと思われる。製作年代としては、余り確かなことは言えないが、我国桃山期から江戸初頭頃ではあるまいか。

（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）

梅牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅱ

佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ

発行年月日 平成2年3月31日

発行者 佐伯市教育委員会
〒876 大分県佐伯市中村南町1-1
☎ 09722-2-3111

印刷 日の丸印刷株式会社
〒874 大分県別府市中央町9番15号
☎ 0977-22-0341
